

第31回

岐阜大学獣医臨床セミナー
教育講演

名古屋市獣医師会と
共催

期日：2014年4月20日（日） 14：00～17：00

場所：名古屋市獣医師会館

<http://www.animalhospital.gifu-u.ac.jp/>

臨床獣医師と病理学的検査

－細胞学的検査を中心に－

村上麻美

（岐阜大学応用生物科学部共同獣医学科
獣医分子病態学（臨床腫瘍学）分野）

はじめに

「病理診断」は、適切な治療のための診断法の一つとして重要な役割を果たしている。ヒトの医療では、病理診断が医療行為であり、病理診断の医療機能への寄与、がん治療の均てん化などを背景にして、2008年4月1日の医療法改正で病理診断科が標榜診療科となるなど¹大きく変化している。

獣医療においても同様で、近年伴侶動物の高齢化に伴い、腫瘍の発生率は増加している。腫瘍に対する現在の治療の流れとしては、臨床検査、画像検査、細胞診やコア生検での術前検査、術後予後判定、術後治療の判定である。手術前後の病理検査は確定診断に必要である。しかし、病理組織学的検査や細胞学的検査の重要性は知りつつも、学生時代の苦手意識から敬遠されている臨床獣医師も多いと思われる。また、病理組織学的検査の結果において、マージンについてなどの今後の治療方針に必要な項目が記載されていない場合もあるであろう。そのようなときには、病理検査会社に問い合わせる必要性が出てくるが、苦手意識があるために、問い合わせができない臨床獣医師の方もいるのではないだろうか。しかし、恐れずに病理検査会社に問い合わせることが重要であり、自分が行った検査の結果を飼い主に伝えるべきである。

細胞学的検査では、採取した細胞が挫滅してしまったり、細胞が適切に採取されていなかったりなど、臨床獣医師側の失宜によって正確な診断を得るまでに時間がかかってしまうこともあるかもしれない。また、病理組織学的検査に提出する方法が誤っていたために、マージン評価が不可能になってしまうという事態も起こりえよう。そのようなことがないように、今一度苦手意識を

表1 細胞学的検査と組織学的検査の比較

	細胞学的検査	組織学的検査
動物への侵襲度	低	高
標本作製時間	5分～	30時間～
診断までの時間	10分～	2日～
細胞の観察	優	劣
組織構築の観察	劣	優
情報量	少	多
確定診断に至る割合	やや低	高
腫瘍疾患の診断	容易	容易
炎症疾患の診断	困難	容易

（文献15より引用）

取り去り、臨床獣医師の先生方が病理学的検査に“慣れる”ために、最低限の知識について解説する。

細胞学的検査と組織学的検査

まずは双方の長所と短所（表1）を理解し、どちらの手法を選択するかを考える必要がある。

細胞学的検査のほうが組織学的検査より迅速で簡便に行うことができるため、処置前の診断法として適応する機会が多い。しかし、細胞学的検査でうまくいかない場合には、組織学的検査に切り替えるなどの柔軟性も必要である。また、組織学的検査においては、生検で採取した検体と外科的に摘出した検体ではその性質が異なっていることを理解して、次のステップに進むことが重要である。

検査で起こりうる失宜

病理学的検査で起こりうる失宜としては、標本/検体